

場所から考える高齢者の地域居住

第4回 フィリピンとネパールにおけるIbashoプロジェクト

Ibasho Japan 代表／千里ニュータウン研究・情報センター 事務局長

田中 康裕

1 Ibasho

IbashoはワシントンDCに拠点を置く非営利法人である。今回はIbashoがフィリピン、ネパールで進めてきたプロジェクトを紹介したい。高齢者を取り巻く状況に関して、欧米に比べてアジアの情報はまだ少ないと思われる。この記事が、アジアの情報を伝える一助となれば幸いである。

Ibasho

Ibashoは、アメリカ在住の日本人女性・清田英巳さんが2008年からボランティアで活動を始め、2011年1月に内国歳入庁 (IRS) から501(c)3 (非営利法人) の認証を受けた団体である。高齢者の権利や地位の向上を目指して活動する上で、高齢者に対する既存の概念を想起させない言葉として、アメリカでは外来語のIbashoが団体名に採用されている。

Ibashoは「歳を重ねること」にまつわる既存の概念、つまり、高齢者がお世話される側の弱者だと認識されてしまう状況を変え、何歳になっても自分にできる役割を担いながら、地域に住み続けることの実現を目指し、次の8理念を掲げて活動を続けている。

①高齢者が知恵と経験を活かすこと (Elder Wisdom)

②「ふつう」を実現すること

(Normalcy)

③地域の人たちがオーナーになること (Community Ownership)

④地域の文化や伝統の魅力を発見すること (Culturally Appropriate)

⑤様々な経歴・能力をもつ人たちが力を発揮できること (De-marginalization)

⑥あらゆる世代がつながりながら学びあうこと (Multi-generational)

⑦ずっと続いていくこと (Resilience)

⑧完全を求めないこと (Embracing Imperfection)

設立以来、Ibashoは高齢者の住まいの計画・建設・改修のコンサルタント、レクチャーなどを行ってきたが、2012年から東日本大震災の被災地である岩手県大船渡市で居場所ハウス^[1]、2015年からIbashoフィリピン、2016年からIbashoネパールのプロジェクトを始めている。

Ibashoフィリピンが活動するのは、甚大な被害をもたらした2013年11月の台風ヨランダ (台風ハイヤン/台風30号) の被災地である。Ibashoフィリピンのメンバーの1人は、「台風後、家や仕事を失った高齢者の『自己有用感』が失われている」と話す^[2]。最新の国勢調査によると、フィリピンの高齢化率は4.7% (2015年)、ネパールの高齢化率は5.2% (2011年) である。いずれも日本の高齢化率26.6% (2015年) に比べると非常に小さいが、高齢化率の大小に関わらず、高齢者が「自己有用感」を持ちながら地域に住み続け

ることが重要であるのは言うまでもない。Ibashoによるプロジェクトは、この実現を目指すものである。

Ibashoのプロジェクトは次のように進められる。

Ibashoは定期的に現地を訪問し、ワークショップやミーティングを開く^[3]。Ibashoが最初に担う重要な役割は、8理念を伝えたり、他国のプロジェクトを紹介したりすることを通して、高齢者を含む地域の人々に「自分たちにも何かができそうだ」という思いを抱いてもらうことである。地域の人々がこのような思いを抱くことから、Ibashoのプロジェクトは始まる。Ibashoはその後も定期的に現地を訪問し、意見交換、知識・技術の提供、他国のプロジェクトのメンバーとの情報交換などの機会を作り出す。

現地では、Ibashoが訪問しない時にもプロジェクトが続けられる。プロジェクトを担うのは高齢者を含む地域の人々であり、これをサポートするために、Ibashoは各国でコーディネーターを雇用する^[4]。

2 Ibasho フィリピン

バランガイ・バゴング・ブハイ

Ibashoフィリピンは、バゴング・ブハイ (Bagong Buhay) というバランガイで活動している。バゴング・ブハイは、レイテ島・オルモック市に110あるバランガイの1つで

(写真1, 図1)^[5]、2015年の国勢調査時点での人口は5,935人である。

バゴング・ブハイとは「新しい生活」を意味する(「Bagong」は「新しい」、「Buhay」は「生活」)。名前の通り比較的新しく開発された地域で、1991年の大洪水の被災者のために建設された住宅もある。

先に触れたように、台風ヨランダによる大きな被害を受けており、Ibashaが2019年に実施した調査では、住宅の被害について有効回答者数269人のうち、52人(19.3%)が全壊、185人(68.8%)が一部損壊と回答している^[6]。

プロジェクトのきっかけ

国際NGOのHelpAge International(以下、HelpAge)が、2014年1月に刊行した東日本大震災に関する研究レポート(HelpAge, 2013)の執筆・編集に、Ibasha代表が協

力したのがプロジェクトのきっかけである。研究レポート刊行後、HelpAgeからIbashaに台風ヨランダの被災地でのプロジェクト実施の可能性について打診があった。当時、HelpAgeはNGOのCOSEとのパートナーシップとしてHelpAge-COSEを立ちあげ、被災地での支援活動を続けていた^[7]。

2014年4月、IbashaはHelpAge-COSEのコーディネートで、バゴング・ブハイを含む5地域を訪問。バゴング・ブハイでは高齢者グループとの意見交換が行われた^[8]。

2014年10~11月に2回目、2015年1月に3回目の訪問が行われた。3回目の訪問時には、取り組みたい活動を考えるワークショップが開かれ、リサイクル、栄養不足の子どもたちに食事を提供する栄養プログラム、農園の3つがあげられた**(写真2)**。

3回目の訪問の後、プロジェクトを始めることが決まり、Ibashaはコー

ディネーターを雇用^[9]。コーディネーターは、3回目の訪問サポートとしてセブから同行していたフィリピン人看護師の男性で、Ibashaの8理念に共感し、コーディネーターを探しているなら自分が引き受けたいと申し出たということである。

2015年2月にコーディネーターがバゴング・ブハイを訪問したところ、既にペットボトルのリサイクルが始められているのを知ることになる。ワークショップでは、リサイクルの開始時期や方法などの具体的なことまで議論されなかったが、ワークショップを受けて自主的にリサイクルが始められていたのである。

Ibashaフィリピンの活動

2015年2月から、コーディネーターのサポートを受けながら活動が進められていく**(表1)**。

(1)農園

リサイクルに次いで始められたのが農園である。住民から借りた土地を清掃し、2015年5月から野菜作り



写真1 バランガイ・バゴング・ブハイ



写真2 取り組みたい活動を考えるワークショップ

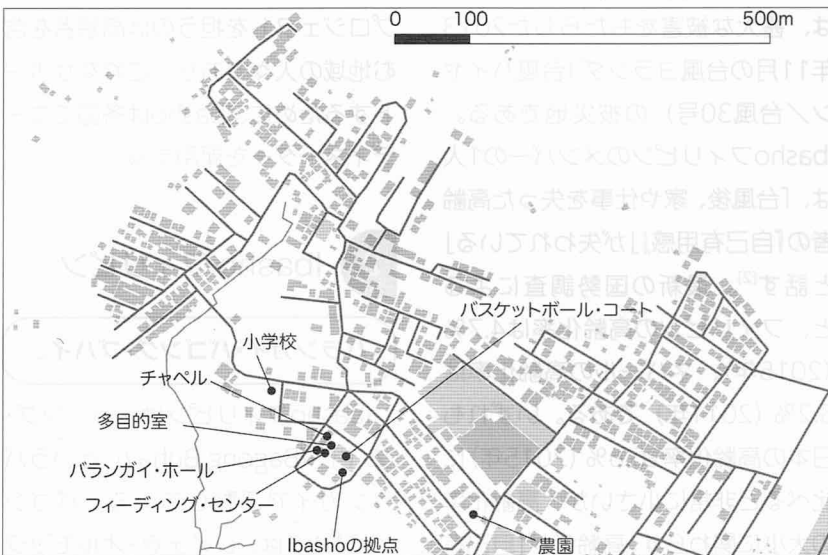


図1 バランガイ・バゴング・ブハイ



写真3 農園(正面左が種苗圃)



写真4 農園でのピクニック
撮影: Ian Michael Parrucho
(コーディネーター)

が始められた。6月にはメンバー手作りの種苗圃が農園の一面に完成。ピクニックが行われるなど、農園、特に屋根のある種苗圃の周りはメンバーが集まる場所になる(写真3, 4)。栄養月間の一環として子どもたちを農園に招待し、収穫した野菜を使った料理を振る舞ったこともある。

2015年10月の4回目の訪問時には、同行した居場所ハウスのメンバーからのアドバイスも受け、農園は少しずつ改善されていった(写真5)。

(2) 活動資金の獲得

回収したペットボトルを業者に販売したり、農園から収穫した野菜をメンバーが買い取ったり、ビンゴ大会を開いたり、Ibashaフィリピンでは活動資金を獲得するための活動が行われている。

活動資金を獲得するために、編み物と石鯰作りの講習会が開かれたこともあるが(写真6)、これらは本格的に始めらることはなかった。

2018年2月には、活動の参考とするためオルモック市内のマンガロープを活用したエコツーリズム・

パークを見学。2018年5月には、農園にひまわりが蒔かれた。収穫したひまわりの種を販売することが目的である。

(3) 地域環境の改善

Ibashaフィリピンのメンバーは、

バランガイから許可を得て、バランガイ・ホール前のフィーディング・センターの改修を行った。2017年5月からベンチの修理、キッチン増設が行われ、7月末にはペンキの塗装が行われた(写真7, 8)。増設されたキッチンでは、子どもたちへの食

表1 Ibashaフィリピンの歩み

(*表中の[〇〇回目]の訪問はワシントンDCのIbashaのメンバーらの訪問を表す。)

年	月	日	主な出来事
2014	1	24	Ibasha代表が、この日のシンポジウムにあわせて刊行された研究レポート「Displacement and older people-The case of the Great East Japan Earthquake and Tsunami of 2011-」(HelpAge, 2013)の執筆・編集に協力
2014	1~2頃		HelpAgeがIbashaに対して、台風ヨランダの被災地でプロジェクト実施の可能性について打診
2014	4	16~20	[1回目の訪問] HelpAge-COSEのコーディネートで、台風ヨランダの被災地であるレイテ島、セブ島の5地域を訪問
2014	10	30~11月2日	[2回目の訪問] 高齢者グループのメンバーからプロジェクトのプロポーザルが示される。小学校敷地内に子どもたちに食事を提供する場所(1建)、高齢者グループのオフィス(2建)のある建物を建設するという内容
2015	1	7~11	[3回目の訪問] ワークショップでリサイクル、子どもの栄養プログラム、農園が提案される。訪問のサポートとして同行していたフィリピン人看護師の男性が、コーディネーターに就任することに合意
2015	1	末	高齢者グループのメンバーが自主的にペットボトルのリサイクルを始める
2015	2	6	コーディネーターがバゴング・プハイへ着任。コーディネーターは既にリサイクルが始められていたことを知る
2015	2	20	Ibashaプロジェクトの最初の会議を開催。会議はプロジェクトのメンバー、コーディネーターが参加。以降、定期的で開催
2015	3	13~19	Ibashaフィリピンの2人、コーディネーターが来日。居場所ハウスの見学、第3回国連防災世界会議のパブリックフォーラム「Elders Leading the Way to Inclusive Community Resilience」への参加を行う
2015	5	2~3	住民から貸りた土地を農園にするために清掃。清掃後、何種類かの野菜の種をまく
2015	6	5	メンバーが手作りで建てた種苗圃がおおよそ完成
2015	7	31	栄養月間の活動の一環として、子どもたちを農園に招待
2015	10	22~29	[4回目の訪問] 居場所ハウスのメンバーが農作業の方法を紹介。子どもの栄養プログラムを屋台(モバイル・カフェ)を使って行うアイデアについて意見交換
2016	1~2		モバイル・カフェのトライアル(2回実施)
2016	6	5	モバイル・カフェのローンチ・イベントとして、バゴング・プハイ内をパレード
2016	9	24	1回目のビンゴ大会を開催
2016	11	20~26	[5回目の訪問] 拠点について意見交換するワークショップを開催。コーディネーターより「Ibashaフィリピン Elders Incorporated」の非営利法人の法人格を取得したことが報告される
2017	5	中旬	フィーディング・センターのベンチ修理、キッチン増設の作業を始める
2017	7	24~29	[6回目の訪問] フィーディング・センターのペンキ塗装。編み物と石鯰作りの講習会、台風と地震への対応についてのワークショップを開催
2018	2	18~22	[7回目の訪問] 拠点の建設について意見交換。オルモック市内のマンガロープ・エコツーリズム・パークを見学
2018	5	26	農園にひまわりの種をまく
2018	6	19~26	[8回目の訪問] 居場所ハウス、Ibashaネパールのメンバーらとともに世界銀行・ADBが主催するマニラでのセミナーに参加。バゴング・プハイに移動し各国のメンバーによるスキル交換として掲示板・クラフト作りなどを行う。拠点の地鎮祭を開催
2018	9	17	拠点の建設工事が始まる
2018	11	21~25	[9回目の訪問] 拠点の運営のアイデアを出しあう。コアメンバーに対するトレーニングを行う
2019	1	11	拠点での1回目の定例会が開催
2019	4	12	拠点に窓格子を設置



写真5 居場所ハウスのメンバーから農作業を教わる



写真6 石鯰作りの講習会



事が調理されたこともある。

(4) 拠点の建設

Ibashiフィリピンに拠点はなく、バランガイ・ホール、多目的室、バスケットボールコート、あるいはメンバーの家で、ワークショップやミーティングが開かれていた。そのため、メンバーからは拠点が欲しいという声があげられていた。2016年1～2月には拠点の運営を考えるための活動としてモバイル・カフェを行い、メンバーは手作りの料理を販売した。

2016年11月の5回目の訪問時点では、バスケットボールコート脇にある土地に拠点を建設することが決まっていた。ワークショップでは実際に敷地の面積を測定し、拠点をどう運営するか、どのような建物にするかについて、オルモック市職員や子どもを交えた話し合いが行われた(写真9)。2018年2月には、拠点の建設に必要な手続きをリストアップし、手続きの担当者の割りあてが行われた(写真10)。

2018年6月に地鎮祭が開催、2018年9月から建設工事が始まる(写真11)。Ibashiフィリピンのメ

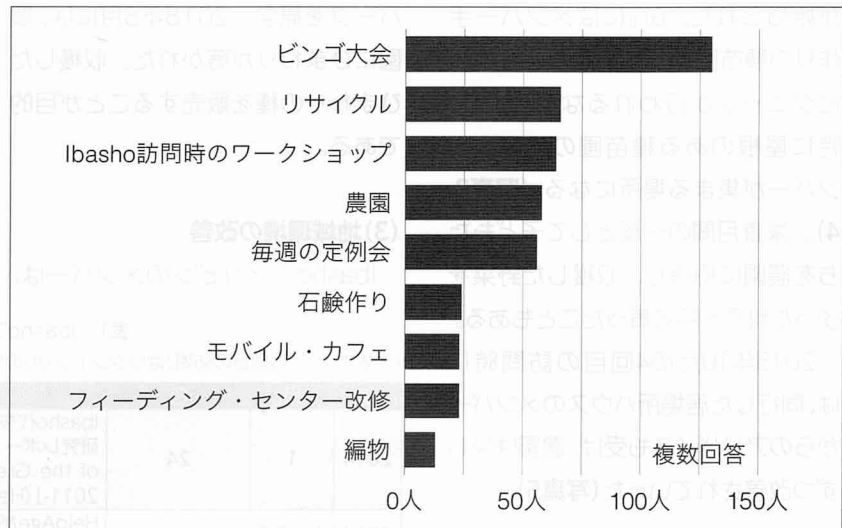


図2 Ibashiフィリピン:参加したことのある活動

ンバーがオルモック市に掛けあい、建設工事はフィリピン軍・第802歩兵旅団が地域貢献として担当することになった。ただし、建設期間中、兵士はバゴング・ブハイの住民の家に寝泊まりし、兵士に飲食を提供するのが条件であり、Ibashiフィリピンのメンバーは食事を差し入れるなどの協力を行った。メンバーの中には、毎日工事現場に顔を出し、自分のできるサポートを続けた元大工の男性もいる。2019年1月、拠点のオープニング・セレモニーが開かれた。

プロジェクトへの参加状況

メンバーの中心は、バゴング・ブハイの高齢者である。Ibashiが実施した2019年の調査によると、有効回答者数269人のうち、154人(57.2%)が何らかの活動に参加したことがあると回答している。参加したことのある活動はビンゴ大会、リサイクル、Ibashi訪問時のワークショップの順に多い。多くの人が参加するこれらの活動に対して、主に中心となるメンバーが参加したのがモバイル・カフェ、フィーディング・



写真7 改修前のフィーディング・センター(写真中央)



写真8 フィーディング・センターのペンキ塗装



写真9 拠点について考えるワークショップ



写真10 拠点建設に向けた手続きの担当を話しあう



写真11 建設中の拠点



写真12 マタティルタ寺院

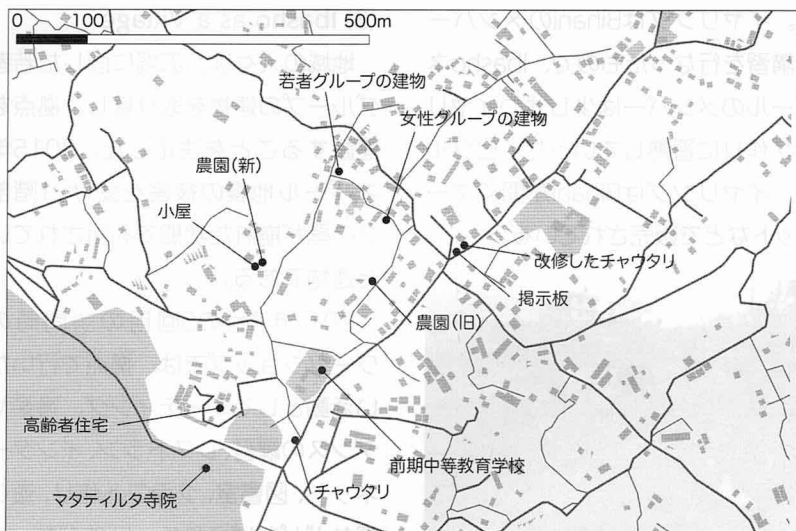


図3 マタティルタ村(マタティルタ寺院周辺)

センターの改修である(図2)。調査結果から、Ibashaフィリピンはバゴング・ブハイの高齢者の半数以上が何らかのかたちで参加していること、その中で中心になるメンバーは20～25人であることがわかる。

3 Ibasha ネパール

マタティルタ村

Ibashaネパールが活動するのは、カトマンズ盆地西部に位置するマタティルタ(Matatirtha)という村である(図3)。マタティルタの村名は「母」を意味する「Mata」と、「神聖な場所」を意味する「Tirtha」の2つのサンスクリット語に由来。村にあるマタティルタ寺院には、村名の由来になっている母の像が祀られた神聖な池があり(写真12)、毎年、母の日には多くの巡礼者が訪れ



写真13 取り組みたい活動を考えるワークショップ

る。人口は約1,500人とされている^[10]。

マタティルタ、及び周辺地域は、2015年ネパール地震の被害を受けており、Ibashaが2018年に実施した調査によれば、住宅の被害について有効回答者数299人のうち、22人(7.4%)が全壊、117人(39.1%)が一部損壊と回答している^[11]。

プロジェクトのきっかけ

Ibashaは、2015年3月の第3回国連防災世界会議にあわせて、居場所ハウスに関する研究レポート(Kiyota et al., 2015)を刊行した。ウェブサイト公開されていた研究レポートを読んだソーシャル・ベンチャーのBihani代表から^[12]、2015年ネパール地震の被災地におけるIbashaプロジェクトの可能性について打診があったのが、最初のきっかけである。

2016年2月、IbashaはBihaniのコーディネートでカトマンズ盆地内の3地域を訪問。訪問した地域の1つがマタティルタで、高齢者住宅のスタッフ^[13]、女性グループのメンバーらとの意見交換が行われた。

地域の人々が活動を始めたいと考えたため、2016年6月に2回目、2016

年7月に3回目の訪問が行われる。3回目の訪問時には、取り組みたい活動として事前にあげられていた花の栽培、農園、堆肥作り、ハンドクラフト作りについて意見交換した(写真13)。ワークショップに鉢植えの花の見本を持参するメンバーもいた。ワークショップでの議論により、最初に花の栽培、農園、堆肥作りに関連させて行うことを確認した。3回目の訪問の後、Bihaniが団体としてコーディネーターを務めることとなった。

プロジェクトの歩み

3回目の訪問の後、具体的な活動が始まる(表2)。

(1)花の栽培・農園・堆肥作り

ワークショップを受け、花の栽培・農園・堆肥作りそれぞれのリーダーが決められた。リーダーは、ワークショップに参加していた高齢者、女性グループ、前期中等教育学校(Lower Secondary School)の子どもの3つのグループそれぞれから選ばれた。

2016年8月、高齢者住宅の建物脇のスペースで花の栽培が始められた(写真14)。8月末にはBihaniの紹介で、約30人がカトマンズ盆地内のエコ・ヴィレッジを訪問し、バイオダイナミック農法を見学。2016年9月から住民が所有する空き地を借りて農園とし、バイオダイナミック農法による野菜作り、堆肥作りが始められた(写真15)。

ただし、この土地では水の確保が難しかったため、2018年5月からは別の土地で農作業が行われている。

(2)活動資金の獲得

Ibashaネパールでも活動資金を得るための活動が行われている。主な活動はピクルス、イヤリングの制作・



販売であり、活動の実施にあたってはコーディネーターのBihaniが大きな役割を担っている。農園で収穫した野菜を使ったピクルスは、女性グループのメンバーが作ったもので、Bihaniがパッケージのデザインを担

当。イヤリングはBihaniのメンバーが講習を行なったもので、Ibashaネパールのメンバーは少しずつイヤリング作りに習熟していった。ピクルス、イヤリングはBihaniが開くマーケットなどで販売されている。



写真14 高齢者住宅の建物脇の花壇



写真15 農作業をするメンバー

表2 Ibashaネパールの歩み

(*表中の[〇〇回目]の訪問はワシントンDCのIbashaのメンバーらの訪問を表す。)

年	月	日	主な出来事
2015	3	18	第3回国連防災世界会議のパブリックフォーラム開催に合わせて研究レポート「Elders Leading the Way to Resilience (Conference Version)」(The World Bank, 2015)を刊行
2015			ウェブ上に公開されていた研究レポートを読んだソーシャルベンチャー・Bihani代表がIbashaに対して、2015年ネパール地震の被災地でIbashaプロジェクト実施の可能性について打診
2016	2	19~28	[1回目の訪問] Bihaniのコーディネートで2015年ネパール地震の被災地など3地域を訪問
2016	6	5~9	[2回目の訪問] Ibashaの理念と、居場所ハウス、Ibashaフィリピンの活動を紹介。来月までにプロジェクトで取り組みたい活動を考えることを確認
2016	6	22	住民がBihani代表に花の栽培、農園、堆肥作り、ハンドクラフト作りの4つの活動に取り組みたいと伝える
2016	7	9~13	[3回目の訪問] 4つの活動について具体的な進め方を意見交換。Bihaniが団体としてプロジェクトのコーディネーターをつとめることを確認
2016	7	14	花の栽培、農園、堆肥作り、それぞれの活動のリーダーを決定
2016	8	3	高齢者住宅の建物脇のスペースを花壇とする
2016	8	29	カトマンズのエコ・ビレッジを訪問し、パイオダイナミック農法による野菜作り、堆肥作りを学ぶ
2016	9	中旬	住民から提供された土地で野菜作りを始める
2016	9	23	リサイクルしたペットボトルを鉢植えに利用するためのアイデアを交換
2016	12	24~2017年1月5日	[4回目の訪問] 拠点の建設について意見交換。候補となる3ヶ所の敷地を見学
2017	2	1	女性グループのメンバーがミーティングにピクルスを持参。新しい活動としてイヤリング作りについて意見交換
2017	3	11~19	[5回目の訪問] 拠点について意見交換するワークショップを開催。アメリカから同行していた建築家が建物の模型を制作。「Ibasha as a Village」の考えについて意見交換
2017	6	6	Bihaniのメンバーがイヤリングの作り方を紹介
2017	7		水の確保が難しいため、農園を別の場所に移すことを話しあう
2017	7	31~8月13日	[6回目の訪問] 「Ibasha as a Village」についての意見交換、掲示板作りを行う。チャウタリを実際に訪問してサイズを測定
2018	1	8~22	[7回目の訪問] 拠点についてのミーティングを開催。参加者は拠点を建設しないことを決定
2018	1	9	昨年8月にフレームを作成していた掲示板が完成し設置される
2018	4	20	チャウタリの改修作業を始める
2018	5	18	新しい農園に小屋を建設する作業を始める
2018	5	末	新しい農園での農作業を始める
2018	6	中旬	農園の小屋がおおよそ完成。チャウタリのペンキ塗装が終わる
2018	6	19~26	5人のメンバーとコーディネーターがフィリピンを訪問。世界銀行・ADBが主催するセミナーに参加した後、バゴング・ブハイを訪問
2018	10	上旬	農園脇の小屋が完成
2018	12	21~2019年1月1日	[8回目の訪問] 今後の活動についての意見交換、コアメンバーに対するトレーニングを行う

(3) Ibasha as a Village

地域の人々は、広場に面した若者グループの建物を取り壊し、拠点を建設することを決定した。2015年ネパール地震の被害を受け、1階部分の壁が崩れた状態で利用されていた建物である。

2017年3月の5回目の訪問時のワークショップでは、拠点で行いたい活動としてミーティング、音楽やダンスの練習、レストラン、インターネット、図書室、クラフト作り、遊び場などがあげられた。けれども、これら全てを拠点で行うことはできない。そこで拠点だけで全ての活動を行うのではなく、既存の場所も活用して村全体でIbashaの8理念を実現する「Ibasha as a Village」の考え方を議論した。ワークショップでは村の地図を描き、どの場所でもどのような活動ができるかを共有することが行われた(写真16, 17)。

2017年7月の6回目の訪問時には、「Ibasha as a Village」実現のために具体的にできることを議論し、取り組みたい活動としてチャウタリ(Chautari)の改修、Ibashaプロジェクトの掲示板作り、高齢者住宅



写真16 若者グループの建物でのワークショップ



写真17 ワークショップで村の地図を描く参加者

に図書室を開くための本棚作りの3つがあげられた。

ネパールでは菩提樹の木の下が舗装され、座れるようになっている。これがチャウタリである。村にあるチャウタリは高齢者が座りにくい形であるため、座りやすくするための改修が提案され、ミーティングの後、実際にチャウタリを訪れてサイズを測定した(写真18)。

「Ibasha as a Village」実現のためには、村のどの場所で活動しているかを伝えることが重要になる。掲



写真18 チャウタリのサイズ測定



写真20 設置された掲示板(左)と改修されたチャウタリ(右)

示板はその地図を掲示するためのもので、訪問に同行していたアメリカの建築家のサポートにより、掲示板作りが行われた(写真19)。

2018年1月の7回目の訪問では、拠点を建設するか否かの意志を最終的に確認するためのミーティングが開かれた。Ibashaからは、「Ibasha as a Village」を実現するための拠点にすることで、セットバックさせて建築することで周囲の広場と池を連続させたオープンスペースを生み出すことの、2つのコンセプトが伝えられた。



写真19 掲示板作り



写真21 農園脇に建てられた小屋

後者は近年の住宅開発に伴いオープンスペースが減少しつつある状況を受けたものである。地域の人々による議論がなされた結果、拠点を建設しないことが決定された^[14]。

拠点は建設されないこととなり、プロジェクトは既存の場所で行われることになった。ただし、2018年4月にはチャウタリの改修が行われたり(写真20)、2018年5月からは農園脇に小屋を作り始めたりと、メンバーは村の環境に手を加え場所を作ってきた。小屋は、元大工の男性が中心となり建設が進められたもので、農具を保管したり、メンバーが集まったりする場所として利用されている(写真21)。

プロジェクトへの参加状況

主な参加者は高齢者、女性グループのメンバーだが、ワークショップに前期中等教育学校の子どもが参加したこともある。メンバーの1人が、これまで世代を越えた人が共に議論する機会がなかったと話すように、Ibashaのプロジェクトは世代を越えた人々が議論する機会を生み出している。参加者数の推移をみると

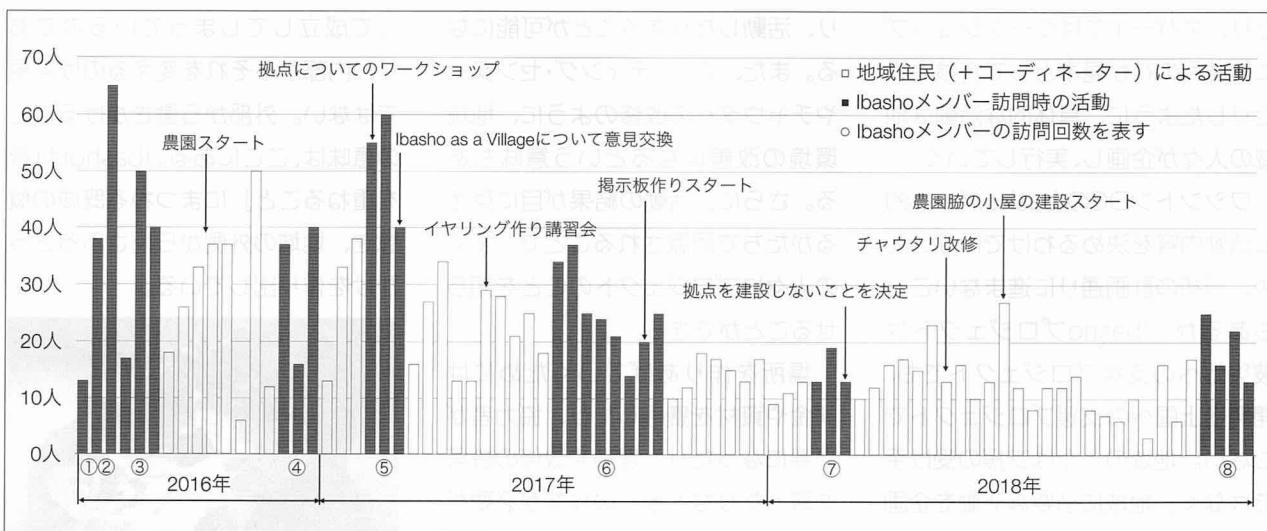


図4 Ibashaネパール:参加者数の推移

(筆者、及びコーディネーターのフィールドノート等の資料より。グラフはIbashaのメンバー、あるいはコーディネーターが訪問した日のみを記しており、グラフに記した日以外も、地域住民のみで活動が行われている。)



(図4)、拠点の建設のワークショップを開いた2017年3月頃までは60～70人ほどが参加することもあったが、その後は減少しており、最近では10～20人の参加となっている。最近まで活動に参加しているのが、中心となるメンバーだと言える^[15]。

4 lbasho プロジェクトと地域居住

lbashoがフィリピン、ネパールで進めてきたプロジェクトの特徴として、次の3点をあげることができる。いずれも、日本における地域居住を考える上でも重要な点である。

高齢者を含めた地域の人々が当事者になる

フィリピン、ネパール、いずれのプロジェクトも、現地で高齢者支援を行う団体からワシントンDCのlbashoへのコンタクトがきっかけで始まっている。従って、地域の人々自らが立ちあげたとは言えない。しかし、プロジェクトにおける具体的な活動は、地域の人々に対して取り組みたい活動を問いかけることから始まる。そして、フィリピンでは自主的にリサイクルが始められたり、ネパールではワークショップに鉢植えの花が見本として持参されたりしたように、具体的な活動は地域の人々が企画し、実行していく。

ワシントンDCのlbashoが一方的に活動内容を決めるわけではないため、当初の計画通りに進まないこともあるが、lbashoプロジェクトは被災地への支援プロジェクトでも、開発途上国への支援プロジェクトでもない。地域の人々は支援の受け手ではなく、地域に必要な活動を企画し、実行する当事者なのである。

金銭のやり取りを通じた地域との関わり

フィリピンでは回収したペットボトルを販売したり、農園で収穫した野菜をメンバーが買い取ったり、ビンゴ大会などを行ったりしてきた。ネパールではピクルス、イヤリングの販売などを行ってきた。このように、活動資金を獲得すること自体がlbashoプロジェクトの一部になっている。

活動資金の獲得はプロジェクトを持続させるために重要だが、高齢者が地域との関わりとの接点になるという点でも重要である。地域とは生業の場所で、そこでは金銭のやり取りが行われている。地域で暮らすとは、生業や金銭のやり取りから隔離されないということである。

具体的な場所を作りあげる

フィリピンでは、拠点の建設に加えて農園の種苗圃、フィーディング・センターの改修が行われた。ネパールでは拠点を建設していないが、「lbasho as a Village」の考えを掲げ、チャウタリの改修、農園脇の小屋の建設が行われた。

場所が生まれることで集まったり、活動したりすることが可能になる。また、フィーディング・センターやチャウタリの改修のように、地域環境の改善になるという意味もある。さらに、活動の結果が目に見えるかたちで認識されることで、多くの人々にプロジェクトのことを知らせることができる。

場所を作りあげていくためには資金や資材を獲得したり、協力者が必要になったり、建築や改修の許可を取ったりなど多くの作業が必要だが、このプロセス自体が議論や意志決定の機会、役割を担う機会になる。

lbashoが目指すのは、「歳を重ねること」にまつわる既成の概念を変えることである。高齢者はしばしばお世話される側の弱者と見なされる。その一方、様々な知識・技術の宝庫として、完成された存在と見なされることもある。いずれも高齢者のある側面を捉えたものだが、lbashoプロジェクトからは高齢者の別の姿が浮かびあがってくる。

lbashoフィリピンのあるメンバーは、プロジェクトの影響について「高齢者に注目が集まることで、高齢者が積極的になり、まとまることができるようになった」と記している^[16]。lbashoネパールでは1人の高齢の男性が積極的にイヤリング作りに関わり、より良いイヤリング作りのための試行錯誤を続けているが(写真22)、ネパールでは一般的に高齢の男性が座ってイヤリング作りをすることは無いという^[17]。

lbashoプロジェクトを通して浮かびあがってくるのは、人は何歳になっても新たなことを学べる存在だということ、高齢者が変わり得る存在だということである。

ただし、既成の概念とは、内部の人々にとっては当たり前のもになっているからこそ、既存の概念として成立してしまっているのであり、内部からそれを変えるのは容易ではない。外部から働きかけることの意味は、ここにある。lbashoは「歳を重ねること」にまつわる既成の概念を、地域の外側から揺さぶるきっかけを作り出している。



写真22 イヤリング作りに参加する高齢の男性

〈注〉

- [1] 居場所ハウスについては、田中 (2016, 2018) を参照。
- [2] 2015年3月、Ibashaフィリピンのメンバーが居場所ハウスを訪問した際、日本の新聞記者の取材を受けた際の発言。「被災高齢者に居場所を」・『岩手日報』2015年3月15日号より。
- [3] 訪問には建築家、写真家、研究者などの専門家、各国のIbashaプロジェクトに関わるメンバーが同行することもある。筆者はフィリピン、ネパールの全ての訪問に同行してきた。
- [4] 2019年3月まで、フィリピンとネパールにおけるプロジェクトは世界銀行の防災グローバル・ファシリティ (GFDRR) のプログラム [Inclusive Community Resilience program]、日本・世界銀行によるプログラム [Japan - World Bank Program on Mainstreaming Disaster Risk Management in Developing Countries program] のサポートと、世界銀行東京防災ハブによる技術的サポートを受けて行われた。これらは建物の建設というハード面ではなく、知識・技術交換、調査、コーディネーターの雇用などソフト面へのサポートである。
- [5] バランガイ (Barangay) はフィリピンにおける行政の最小単位。
- [6] Ibashaがプロジェクトの一環として、プロジェクトの効果や課題を見出すために実施した調査。調査期間は2019年1月5日～1月23日である。調査対象はバゴング・ブハイの60歳以上の全住民 (高齢者グループのメンバー)。年度は異なるが、2015年の国勢調査時点で、バ

ゴング・ブハイの60歳以上の人口が369人であることを考慮すれば、調査には60歳以上の住民の約7割が回答していると考えることができる。

- [7] HelpAgeは、高齢者が威厳をもちながら、健康で安全に暮らせる権利を促進するための活動を行う団体の世界的なネットワークである。1983年に設立され、現在では75以上の国々の120を超える団体が加入している。COSE (Coalition of Services of the Elderly) は1991年からネットワークに加入。HelpAge-COSEは、台風の被災地支援に協働で組織的に対応するために設立された直接的なパートナーシップである (Clarke, 2014)。
- [8] 高齢者グループ (Senior Citizens Association) はバランガイの60歳以上の全住民が加入する団体であり、HelpAgeは各バランガイで高齢者グループ設立のサポートを行った。バゴング・ブハイの高齢者グループとIbashaフィリピンのメンバーには重複があるが、両者は別の団体である。
- [9] 3回目までの訪問はHelpAge-COSEのコーディネートによって行われたが、この後はIbashaが単独でプロジェクトを進めることとなった。
- [10] 人口は2016年4月にコーディネーターが作成した資料より。Ibashaのプロジェクトが行われているマタティルタは、マタティルタ寺院の周辺地域の呼称である。行政区としては第三州・カトマンズ郡・チャンドラギリ市 (Chandragir Municipality) のWard 6の一部である。な

お、行政区では隣接するWard 8がマタティルタと呼ばれるが、Ibashaのプロジェクトが行われているマタティルタとは別の地域である。

- [11] フィリピンと同様の目的の調査で、調査期間は2018年1月16日～2018年5月31日。調査対象はマタティルタ村、及び周辺地域の60歳以上の住民の一部である。
- [12] Bihaniはカトマンズに拠点をおくソーシャル・ベンチャーで、主に50歳以上の人 (高齢者) がそれまでの人生で身につけた経験をいかしながら、関係のあみ直しと探求により、より良い後半生を実現していくことのサポートを目的としている。Bihaniは「朝」を意味する語で、新しい始まりという意味を込めて、この語が団体名に採用されている。
- [13] 高齢者住宅 (Oldage Home) は住民によって結成された委員会によって運営されており、身寄りがなかったり、虐待を受けたりした高齢の女性約25人が生活している。Bihaniは以前からこの高齢者住宅のサポートを行っていた。
- [14] 宅地開発によりオープンスペースが失われつつある現状は理解しているが、建設予定地にはオープンスペースを確保するより、大きな建物を建設することを優先したい。そのため、Ibashaプロジェクトによる資金は不足しており、自分たちで資金を確保したい。拠点を建てない決定にはこうした理由があると考えられる。
- [15] 初期に参加者が多いのは、海外から支援してもらえると期

